

ディベート教育 — その構想と実践 —

渡部 淳

はじめに

筆者は、帰国生徒受入れ校であるICU高校(1978年設立)で、90カ国・2千名を越す帰国生の教育体験を調査し、海外と日本の教育方法の比較研究を進めている。これまでの研究を通して筆者は、日本の授業があまりに知識注入型のそれに偏りすぎていること、今後は生徒の自主性を育てる獲得型の授業に徐々にシフトしていく必要のあることなどを指摘してきた。

欧米の授業を例にとれば、獲得型授業には次のような二つの側面がある。その一つは生徒の発言・発表や討論など授業への参加を求める形態の指導であり、もう一つは、プロジェクト、レポート、エッセー、リサーチ・ペーパーなどを通して個人学習の指導を行うことである。この両者は密接に関連しあひながら、深く教育体系の中に組み込まれている。^(注1)

比較研究と平行しながら、これまで筆者自身も獲得型の授業を実践してきた。その一つは、「政治経済」の授業で3千人以上の3年生が作成してきた「政経レポート」にかかわる実践であり、もう一つが、「政経演習(セミナー)」クラスでの発表・討論型の授業実践である。^(注2)

本論稿では、筆者が13年間にわたって続けてきた獲得型授業のうち、生徒の発表・討論を中心とする領域の実践に焦点をあてて分析を試みるものである。

I 目的

本稿の目的は、ICU高校の「政治経済演習」クラスでの実践を事例として、ディベート教育の年間カリキュラム、生徒の活動の実際、生徒の変容、教師の役割などについて考察を加えることである。分析の対象となる政経演習クラスは、1980年度から開講されている3年生対象の選択科目（2単位）である。

筆者はここで、ディベート教育という言葉、授業への生徒の積極的参加を前提とする獲得型の学習指導に関わる概念として用いることにする。従ってディベート教育は、単にディベート・フォーマットにのっとった討論の仕方を教える、という意味での、狭義のディベート指導をさすものではない。生徒自身が特定のテーマについて調査をすすめ、それを発表し、討論をたたかわせる中で、必要な知識を獲得すると同時に、リサーチの仕方や様々なタイプの表現方法（スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなど）を経験し、その能力を身につけていく教育のことである。

政経演習の授業を通して、筆者は次のような目標を達成したいと考えている。

第1に、発表・討論など参加型の学習を経験するなかで、生徒が自己を表現することの楽しさや、相互に啓発しあいながら学ぶことの大切さを理解できるようにすること。

第2に、調査・発表・討論にかかわるスキルの基本を身につけさせること。これらの力を身につけることは、生徒自身の肯定的な自己評価につながり、将来の社会を生きていく上で、彼らに大きな自信を与えてくれるはずである。

第3に、政経演習クラスの生徒たちは、授業クラスとして学校祭で研究発表を続けている。この活動を通して、生徒なりの視点から社会問題に対する解決策を提案し、人びとに主体的に働きかける経験をもたせたいと考えている。

第4に、これら一連の学習活動を通じて、生徒一人ひとりが批判的理性を獲得していけるように援助すること。それは、彼らが固定観念や偏見から自由になり、自分の目でものを見、自分の頭で考えられるようになるということである。それはまた、特定の課題について、必要な情報を収集、分析、総合して自分なりの結論を的確に導きだせるようになるということでもある。

上述の目標を達成するためには、共に学ぶ学習集団としてのクラスが、自由でのびのびした討論の場となっていることが必要である。そうした雰囲気の中でこそ、世界の問題を自分の問題として考え、行動する姿勢を育めるからである。この点では、教師の適切なアドバイスが特に重要となってくる。

同時にまた、自由な討議を受け入れこれに参加することや、国内的及び国際的諸問題について批判的理解力を獲得することなどは「ユネスコ国際教育勧告」(1974年)の趣旨とも重なっている。その意味で筆者は、このディベート教育が、日本における国際教育の実践の一つであるという自覚をもって取り組んでいる。

本稿では、主に1992年度の授業実践を軸に分析をすすめることとする。この年は、3年生240名のうち60名が政経演習を履修した。履修者数が過去最高を記録したこともあって、分析のための資料も豊富に得られた年でもあった。授業は、60名をグループⅠ(GⅠ)からグループⅢ(GⅢ)までの3つに分割し、一人の教師がほぼ同じカリキュラムで進めていった。

Ⅱ 方法

政経演習の年間授業時数は、1学期と2学期あわせて約40時間である。ここでまず、授業の運営方法を見ておくことにする。

A. グループ・プレゼンテーション及びフリー・ディスカッション／ディベート

総授業時数の半分に当たる 20 時間ほどを、グループによる発表と全体討論にあてる。この発表・討論学習の流れは次のようである。

グループごとのテーマ決め（課外）→グループ・リサーチ（課外）→グループ・プレゼンテーション（1 時間）→全員によるディスカッション／ディベートとまとめ（1 時間）

これは授業としては 2 時間 1 セットのプログラムである。1 時間目に各グループ（3～5 名規模）が選んだトピックについて発表し、それをもとに質疑応答をする。各グループとも、1 トピックに 2 週間程度の準備期間をあて、発表時にレジュメを用意する。ただし、92 年度ではプリントを説明するだけの発表はほとんどない。内容を自作のスキット（寸劇）で実演するなど、ほとんどが立体的な発表形式で行われている。従って、従来の日本の学校で行われている「発表」とは区別して、あえて授業では「プレゼンテーション」と呼んでいる。

2 時間目は発表内容をもとに、全体でフリー・ディスカッションやディベートを行う。発表グループが司会も担当する。フォーマル・ディベートを実施する場合は、フォーマットの選択などを教師主導で進め、3 時間目にジャッジによる講評とまとめの時間をおいている。しかし、原則として教師は、トピック決め、資料作り、発表形態を選ぶ際のアドバイザー役に徹し、討論の時はフロアで一緒に参加するようにしている。

全員が 2 学期間で最低 2 回こうした発表を経験する。なるべく多くの生徒と協同作業ができるように、2 巡目にはグループ・メンバーの組替えをする。

B. 教師主導のプログラム

40 時間のうちの 15 時間ほどは教師主導のプログラムで行う。コースの説明、プレゼンテーションやディベートの技法に関するガイダンス、スピーチ訓練のためのプログラム、1 年間のまとめの話し合いなどがそれである。これらのプログラムは、グループ発表の進み具合をにらみながら、臨機応変に

組み立てる。学期中のどの時期に教師主導のプログラムを入れるかは、ケース・バイ・ケースで判断している。

C. 学校祭の準備と反省

さらに、5時間程度を、学校祭企画の準備（テーマ決め、展示資料作成等）と反省会にあてている。

以上が授業の進め方の概要である。また、スピーチ、ディベートなどのプログラムが終了する節目ごとに、自由記述式のアンケートや感想文の提出をもとめている。

Ⅲ 内容

グループ・プレゼンテーションのテーマは、各グループが話し合いで選ぶこととし、基本的に生徒の問題関心に即して授業をすすめている。テーマの多くは時事問題である。まず新聞、雑誌、テレビなどのマスメディアが伝える資料を手掛かりにし、ついで単行本などでの資料探索に進むケースが一般的である。ただ、生徒自身が関係者にインタビューしたり、現場を訪れて調査したりという具合に、フィールド・ワークも盛んに行われている。

授業で取り上げてたテーマは（表1）にみるように、政治経済、社会問題など、かなりひろい分野に及び、また時代の動向を敏感に映しだしていると言える。テーマ選択で特に留意している点は、第1に、特定の分野にトピックが偏らないようにすること、第2に、「脳死と臓器移植」、「死刑制度の存廃」、「ガン告知」などのような解決済みでない問題にも積極的にチャレンジすることである。こうしたこともあって、ディスカッションでは、特定の結論の共有を急がず、まず「問題点を明らかにする」という立場をとっている。

92年度の授業で行ったディベートは（表2）の通りである。これ以外のテーマについては、フリー・ディスカッション形式で議論が行われた。また、

表1 グループ発表のテーマ

※ 〈 〉 内は教師のサンプル発表

※ 表中の／線の前が1学期、後ろは2学期のテーマ

1987 年度	老人福祉について 脳死について 米軍基地問題 管理教育 韓国情勢について / 株式会社大暴落 食品添加物 名画の盗難 真の豊かさとは I C U 高校について (10)
1988 年度	〈食糧問題〉 パレスチナ問題 新テスト(大学入試)について 教えるべきか東郷元帥 外国人労働者 苦しい留学生 / 天皇の病気 オリンピックは成功だったか 石垣新空港建設問題 鯨の保護 黒人人形問題 原発問題 消費税問題 国労組合員の不採用問題 (14)
1989 年度	〈リクルート問題〉 捕鯨問題 三宅島と安保条約 人工中絶 帰国生問題 受験制度について 指紋押捺 / 偽装難民 天皇制は必要か 性暴力・レイプについて 対米直接投資の現状と問題点(ゲスト・スピーカー) 米の自由化問題 “お見合い” 是か非か (13)
1990 年度	〈行ってみた中国〉 死刑制度について 留学生問題 ODAについて 病気(ガン)告知について / 自衛隊派遣問題 代理母問題 即位の礼と大嘗祭 もしあなたが警察に捕まったら 男女雇用機会均等法 資源問題 米の輸入自由化 (12)
1991 年度	〈コメ問題〉 北方領土問題 女性解放 ロスの警察犯罪 日本の大学 煙草問題 安楽死について / P K O 法案 売買春について 宗教ブーム 野菜価格の高騰 “宮沢りえ” 現象 学校5日制について 国際貢献について (14)
1992 年度	G I ; 〈コメの輸入自由化と貿易問題〉 著作権問題 P K O 法案 ロス暴動について 小錦と横綱問題 死刑制度は是か非か / 栄養ドリンク キセル乗車 原発問題 ユーゴ情勢(ゲスト・ス ピーカー) エイズ問題 男女平等社会 (12)
	G II ; 〈コメの輸入自由化と貿易問題〉 ドイツの外国人労働者問題 キング氏事件 看護婦不足について 米国教育事情(教師) 脳死問題 / ゴミ問題 国籍の問題 留学生射殺事件 マドンナの写真集と性表現 ラテンアメリカ徒然草(ゲスト・スピーカー) (11)
	G III ; 〈コメの輸入自由化と貿易問題〉 日本の英語教育 妊娠中絶問題 外国人労働者問題 米国教育事情(教師) 学校週5日制 / 冷凍寿司の輸入とコメ問題 高校留学 天皇の中国訪問 ラテンアメリカ徒然草(ゲスト・スピーカー) エイズ問題 (11)

「結婚はお見合いがいいか恋愛がいいか」は、ディベートの技法を教えるための即興ディベートの論題である。

政経演習が開講された14年前は、世界史・日本史・地理など他の演習科目と同様、受験対策の科目であった。このため最初の6年間は、必修「政経」で政治分野を中心に扱い、「政経演習」では経済分野の大学入試問題解説とグループ発表を2本立てで行うという方針をとった。

しかし、政経受験者数の減少や履修生徒の希望などもあって、発表・討論の比重を徐々に高める方向に軌道修正してきた。現在は、2年生を対象とする「科目選択説明会」で、政経演習が必ずしも受験対策の科目ではないこと、生徒のグループ発表と討論が中心のクラスであること、それでも時事問題を考え、レジュメをつくり、発表したりすることを通して現今の小論文入試には役立つはずである、などのことを説明している。

表2 ディベートの論題（1992年度）

G I	4月29日	結婚はお見合いがいいか恋愛がいいか
	5月18日	警官たちを有罪にすべきか（ロス暴動）
	6月8日	外国人横綱を認めるべきか
	6月22日	死刑制度は是か否か
G II	5月1日	結婚はお見合いがいいか恋愛がいいか
	5月15日	警官たちを有罪にすべきか（ロス暴動）
	6月19日	臓器移植は認めるべきか
	11月6日	マスコミの性表現を規制するべきか
	11月26日	高齢化社会の家族関係において2世代同居は最良の形態か
G III	5月2日	結婚はお見合いがいいか恋愛がいいか
	5月9日	妊娠中絶は禁止すべきか
	6月10日	学校週5日制は是か否か
	11月26日	高齢化社会の家族関係において2世代同居は最良の形態か

IV 対象

I C U高校は学年定員(240名)の3分の2が帰国生枠である。このため、政経演習の履修者60名の中にも、帰国生が37名含まれている。その内訳は、現地校出身者32名、日本人学校出身者5名である。また国内生が23名となっている。なお、男女比で見ると、男子11名、女子49名で、例年に比較して女子の比率が高いのが特徴である。

帰国生が多いことによって、海外と日本の状況の比較が容易になり、ディスカッションに幅と奥行きが生まれていることも見逃せない点である。ただ、海外の学校でディベートの訓練を受けた生徒は殆どいない。例えば、アメリカには「SPEECH & DEBATE」「DEBATE & DRAMA」などのクラスがあるが、これらは10～12年生を対象としているのが普通で、I C U高校の生徒の大部分はその年齢に達する以前に帰国しているからである。

生徒の実態を知るために、第1回目の授業でアンケートを実施している。調査項目は、①政経演習クラスを選択した動機、②授業形態への希望、③いま興味をもっているテーマ、④フィールド・ワークにいてみたい場所の4項目である。コース選択の動機を分析してみると、上級生や家族のすすめによって選択した生徒の多いことが特徴である。「普通の日本の学校ではやらないことをすると先輩から聞いたので」などの理由が、60名中9名であった。

この他にも、「以前の研究発表を見て自分もやりたいと思った」、「調査や発表、討論の力をつけたい」、「ディベートができると聞いたので」、「将来の進路や生き方に役立てたい」などの積極的な動機で選択している生徒の多いことが特徴である。

V 取り組みの実際

A. 通常の授業

年間授業時数は、3クラスの平均で41時間であった。ここでは1992年度

の授業のうち、GⅢのカリキュラムを示す。時間的なずれはあっても、他グループもほぼ同じカリキュラムで行っている。

a. 1学期（21時間）の内容

1学期には、全員が1回ずつのグループ発表を経験する。この中でレジユメの作り方や、さまざまなプレゼンテーションの基礎を学び、スキット、クイズ、模擬裁判、紙芝居などの技法を使って実際の発表を行う。さらに、発表内容をめぐって、全員でフリーディスカッションやディベートを行う。4回の討論の中で、全員がディベーターとジャッジの両方を経験し、伝統型ディベート、尋問型ディベートの基礎を学ぶ。^(注3)

ガイダンス（1時間）…コース内容の説明、アンケートによる希望調査、グループ作り

教師の発表（1時間）…レジユメの作り方、発表の仕方のサンプルを示す。リサーチ方法の解説

ビデオ視聴（1時間）…上級生の発表を見る。グループ・プレゼンテーションの意義について考える

教師の講義（1時間）…ディベートの体系、ルールおよび技法について説明

発表・討論（4時間）…2時間1セットで、発表と全体討論。2テーマ
休 講（3時間）…海外出張

出張報告（1時間）…“ニューヨーク、ニュージャージー教育事情”
について

発表・討論（4時間）…2時間1セットで、発表と全体討論。2テーマ
学校祭準備（3時間）…テーマ決め、リサーチ計画などの話し合い

b. 2学期（約20時間）の内容

2学期には、学校祭の発表を経験することで、発表・討論についての理

解をさらに深めるとともに、一人ひとりのプレゼンテーション能力をみがくようにつとめる。全員が1分間スピーチ、2分間の即興スピーチを体験する。またロールプレイなどの即興的な表現形式に慣れるようにする。ディベートでは尋問型ディベート、リンカーン・ダグラスディベートの訓練を進める。

学校祭準備（2時間）…展示資料作りなどのグループ作業

ビデオ視聴（1時間）…学校祭の成果であるスキット発表をビデオで鑑賞

企画反省会（1時間）…取り組みのまとめ及び通常授業の発表グループ組替え

スピーチ（3時間）…“よいスピーチとはなにか”について話し合い。
全員の1分間スピーチをビデオで撮影する。
ビデオを視聴しながら感想をだしあう

発表・討論（8時間）…2時間1セットで、発表と全体討論。4テーマ
講演（1時間）…ボランティアのゲスト・スピーカーによる海外
事情報告

“ラテンアメリカ徒然草”

スピーチ（1時間）…2分間の即興スピーチ

ディベート（2時間）…全員が内容を熟知している学校祭のテーマ“高齢化社会”の問題を使ってディベートを行う。
“ディベート教育の意義”について、まとめの話し合い。

まとめ（1時間）…1年間の授業の感想、反省などの話し合い

最後の授業では1年間の総括を行う。ここでは授業の感想だけでなく、“ICU高校は自分にとって何だったか”、“自分の将来の夢”などをめぐってさまざまな意見がだされる。ここでだされた内容は、3学期に生徒と

教師が協力して作るパンフレット「政経演習この1年 1992年版」にまとめて掲載される。

B. 学校祭の取り組み

発表・討論型の学習を続けて5年目の1984年に、生徒側から次のような提案がだされた。「週に2時間の授業ではもの足りない。もっと時間をかけて勉強したい。それにせっきく調べた内容だからほかの人にも伝えたい」というものである。

この提案について議論した結果、クラス全体が協力してひとつのテーマに取り組むこととし、秋の学校祭で「いま考える日本の食糧」というテーマの研究発表をおこなった。模造紙で41枚の発表や食品の実物展示などが好評を博し、この企画には130人を越す参観者が感想文をよせるという活況を呈した。

この経験をもとに、1987年度からは、模造紙による壁新聞形式の展示だけでなく、展示内容を模擬裁判やスキットなどの形で立体的に表現する活動とパンフレットの作成という3本立てで発表をおこなってきた。(別表3)のように、1992年現在までに7回の発表が行われた。これらの企画は、毎年新聞などでその取り組みが紹介され、話題になっている。歴史の浅いICU高校文化祭の、いわば伝統企画のひとつといってよいだろう。

この研究発表は、あくまでも生徒の自発的な取り組みが基本であるため、企画団体名を「政経演習有志」としている。ただ実際は、毎年ほとんどすべての履修者が企画の運営に参加している。従って、学校祭の取り組みは、通常授業と有機的な関連をもって進められている。ここで、92年度の学校祭の取り組みの過程を、以下に簡単に示すことにする。

a. テーマ決定(5月初旬～6月半ば)

ブレイン・ストーミング(エイズ問題、PKO問題、原発問題など30をこす候補テーマがだされる)→候補の絞り込み作業(昼休みなどを使い

表3 学校祭の研究発表

※「 」は発表時の企画名

※()は企画参加生徒数

1984 年度	「いま考える日本の食糧」 展示・パンフレット (11)
1987 年度	「エデュケーション・ナウⅠ 世界の教育比較」 展示・パンフレット 模擬裁判“緑町中学体罰事件” (21)
1988 年度	「エデュケーション・ナウⅡ 教育の中の戦争と平和」 展示・パンフレット ディベート・ドラマ“沖縄戦を中学校で教えるべきか” (23)
1989 年度	「エデュケーション・ナウⅢ いま性について考える」 展示・パンフレット ディベート・ドラマ“高校で避妊教育は必要か” (21)
1990 年度	「エデュケーション・ナウⅣ 外国人労働者問題」 展示・パンフレット ディベート・ドラマ“外国人労働者の存在は、日本人の国際理解をすすめるか” (23)
1991 年度	「エデュケーション・ナウⅤ ゴミ・リサイクルと環境教育」 展示・パンフレット スキット“野川公園ごみ焼却場移転問題”“西暦2千年のごみ戦争” “環境教育の教室風景” (17)
1992 年度	「エデュケーション・ナウⅥ 高齢化社会と福祉」 展示・パンフレット クイズ“高齢化社会” スキット“敬老館・老人ホーム・行政機関をたずねて” (60)

連続的に話し合いをもつ。強く推薦するテーマをもつ生徒は、その旨の文書をだしてほかの生徒を説得する。候補選択の基準は次の3点；全力で取り組めるような奥行きのあるテーマであること。フィールド・ワークなど多様なリサーチを展開できるものであること。参観者のだれにも関心のあるテーマで、自分たちにも身近に感じられるものであること。）→テーマ決定（最終的に「高齢化社会と福祉」に決定するまでには、激しい議論がたたかわされるが、この過程で、展示内容や発表形式についてのイメージが共有されていく。）

b. リサーチ計画の作成（6月半ば）

「高齢化社会の歴史」、「老人をケアする立場」、「お年寄り自身の生活と意見」という三つのリサーチの柱をたてる。60名の生徒が、この柱にそって10のリサーチ・グループを編成する。それぞれグループ・リーダーを決め、具体的なリサーチ計画を作成する。

c. 企画完成までの作業（6月後半～9月半ば）

リサーチ開始→「リーダー会議」（8月初旬）で内容調整→「全体会」（8月後半。丸2日間の研究発表会で内容を共有）→追加リサーチ→模造紙書き込みなどのグループ活動／シナリオ作り→「全体会」（9月初旬。配役決め、リハーサル、グループ全体の主張をまとめる話し合い）→展示完成→9月14／15日「学校祭」本番

発表は2部形式になっている。第1部はクイズ形式。高齢化社会の実態を7問のクイズにまとめ、会場の人々に解答してもらう。第2部はスキット形式。3人の生徒が、敬老館、老人ホーム、行政機関を手分けして訪問し、関係者と話すなかで高齢化社会の実態を学んでゆくというストーリーである。実際のリサーチの過程をそのままスキットで再現し、参観者に追体験してもらう狙いである。

最後の“私たちの言いたいこと”では、4つの提案（「お年寄りと私た

ちの境界線をなくそう」「個人が自分の希望する環境の中で暮らせるような、選択の幅の広い社会をつくろう」「福祉が自然に受けられる社会にしよう」「福祉教育をつくりだそう」)を結論として提出している。

d. 当日の発表

本番では、常設の展示と展示会場を使つてのスキット上演(3回)を行った。出演者16名のスキットだが、なるべく多くの生徒が出演できるよう、配役はトリプル・キャストとした。この研究発表の様子は、1992年9月15日付「朝日新聞」の地方版や同10月10日付「日経新聞」コラムなどで紹介されている。^(注4)

文献探索によって生徒が集めた資料は膨大なものである。また、訪問した機関も、厚生省、都庁、市役所、老人ホーム、老人病院、福祉会館、敬老館など15カ所を数える。このほかにも、老人ホームでボランティア活動をしたり、自宅介護をしている老人世帯を訪問してインタビューするなどの活動を行った。その成果は、B4判で43頁のパンフレットにまとめられている。

VI 授業形態の変遷

政経演習クラスの13年間は、担当教師にとっては手探りで続けた模索の過程であった。その歴史的な流れを概括すると、以下のようになる。

第I期(1980年～85年度)

「生徒による発表と教師による受験問題解説とが半々で行われた時期」
生徒のリサーチ力をたかめることに主眼において指導した時期。学校内の資料にとどまらず、外部からも積極的に情報を集めてくることを奨励し、フィールド・ワークを活発化させるように努めた。その結果、「銀座デパート戦争」ではデパートの広報担当者に、「薬効について」では製薬会社に直接アプロー

ちして得られた情報が発表されるなど、授業が次第に活性化するようになった。

やがてそれが通常のグループ発表の枠を超えて、クラス全体での研究発表につながっていく。韓国から米の緊急輸入が行われた 1984 年に、「食糧問題」で研究発表を行ったのがそれである。この企画を通して、より大規模な生徒の共同研究を組織する方法を模索し始めた。ただ、発表方法は旧来からの模造紙による展示発表が中心であり、ダイナミックにプレゼンテーションを展開するという工夫はまだ不十分だった。

移行期（1986 年）

「講義式授業をやめ、グループ発表・討論だけで授業を運営した年」

年間 18 テーマのグループ発表をおこなった。

第Ⅱ期（1987 年～現在）

「生徒の自己表現能力の開発にむかう時期」

学校祭の研究発表が 87 年から本格化した。これには幾つかの偶然的な要因が関係している。そのひとつは、時間割の関係で 2 コマ続きの授業が可能になり、討論にじっくり取り組む経験ができたこと。また、84 年度に発表で活躍した生徒の妹が受講し、生徒の間で学校祭の発表経験が継承されたことも挙げられる。

その後も、家族のすすめで政経演習を履修する生徒が増える傾向にある。また、学校祭の研究発表をみて I C U 高校入学を決意し、3 年生になってこのクラスを履修したという生徒も複数でてきた。あらかじめコースの内容をよく理解して選択する生徒が多くなってきたことが、生徒の取り組みの継続性を保障する要因のひとつとなっている。

VII 結果

実践の過程では、スピーチ、ディベート、ロールプレイなどのプログラムを終えるたびに、生徒に短いコメントの提出を求めた。それには二つの意味がある。一つは、教師側の授業改善のための資料としての意味である。もう一方では、生徒一人ひとりが自分の活動をまとめ、文章を書くという行為を通して、自らの進歩や次の課題を確認し、新しいステップに進めるように配慮したからである。60名の生徒が残したコメントの枚数は、相当な数にのぼる。

ただ、そうした時々の文章だけから、この1年間の間に生徒の内面で起こった様々な変化を完全に後づけることは、残念ながら不可能である。不十分ではあるが、生徒60名が学年末に書いた授業感想文や、最後の授業で語り合ったこと（「政経演習この1年 1992年版」に所収）などを手掛かりに、生徒が彼ら自身の変容をどう見ているかについて、その傾向性を見ておきたい。ここでは、複数の生徒が言及した5つの点に絞ることにする。

第1は、殆どの生徒にとって、この1年間に経験したプログラムは、初めてのものが多かった。ゼロからの出発ということもあって、1年間のスキルの向上は顕著である。従ってまた、「スピーチや討論の大切さに気づいた」という感想がとくに多かっただけでなく、「1年間の自分の進歩に驚いた」という生徒も複数いた。

第2は、「様々な視点からものを見られるようになった」とか、「ディスカッションをする中で、今まで思いもしなかったような自分を発見できた」などのように、“ものの見方”が変化したことを指摘する感想が多かった。

第3に、通常授業でのグループ活動や学校祭の全体活動を通じて、クラスのメンバーと力をあわせて学び、それを表現することの喜びと充実感を味

わえたという感想が多かった。「グループ活動のなかでチーム・シップの考え方を成熟させるためになった」とか、「学校祭の企画に参加して、高校生活の中でもっとも充実した時間をもてた」などの感想がそれである。

第4に、「自然に意見をいえる雰囲気の大切さ」を指摘し、「他人の意見を笑ったりする傾向が（クラスのなかに）全くないのが良かった」という感想も多かった。これとも関連するが、「まじめなことを真剣に話せる人たちと出会えた」ことが嬉しいという感想も少なくなかった。

第5に、総じて、ほとんどの生徒が「政経演習をとって良かった」、「楽しかった」と1年間の経験を肯定的に評価している。

VIII 考察

- (1) グループ・リサーチ→グループ・プレゼンテーション→ディスカッション／ディベートという流れをたどる発表・討論型の学習指導の方法は、生徒が政治や経済そして社会問題の奥にひそむ多様な論点を掘り起こし、それについて主体的に学んでゆくために開発してきたものである。ただこの方法は、生徒が自己表現の多様な形態について学び、その力を獲得していく上でもかなりの有効性をもっていると考ええる。
- (2) 生徒たちは、3カ月の期間を費やして準備し、学校祭で問題提起をおこなってきた。それは、学ぶという行為を通して行われる一つの社会参加の形態でもある。この大規模な取り組みを通して彼らは、通常授業では得られないような、より深い問題意識を得ると同時に、より大きな達成感を味わっている。
- (3) 政経演習の履修者は当然ながら毎年入れ替る。この中で、取り組みの継

続性を確保するためには、特別な配慮が必要である。前年度の発表ビデオやパンフレットなどのような、過去の経験の蓄積を翌年度の授業で活用し、新しいメンバーの取り組みを励ますことなどがそれである。

- (4) ICU高校からICUへの推薦入学率は20パーセントほど。政経演習選択者の大部分も、一般受験で進学する受験生である。こうした生徒たちが授業以外の場で研究発表を続けてゆくためには、一人ひとりがそれなりの葛藤を経ているはずである。それを乗り越えさせる力の一つは、通常授業を通して培われる生徒同士の協力関係であろう。
- (5) このディベート教育において、教師は、マラソン・ランナーに伴走するコーチの役割にも比すべき存在である。自分自身が競技者ではない。しかし、ただ見守っているだけの存在でもない。また、獲得型授業においては、生徒集団の雰囲気だけでなく、生徒集団と教師の関係の在り方も、実践の質に影響及ぼしてくる。その意味でも、常に柔軟な発想をもち、教師自身が識見を高めるように努めたいと考えている。
- (6) 政経演習では、履修した生徒に自己表現の技法を基礎から指導している。それは、生徒の教育背景を考慮した結果である。しかし、小中学校の段階で自己表現の指導が広く行われるようになれば、それに対応して今後も指導のねらいやカリキュラムを変えていくことになるだろう。従って、現行の形態は決して最終的なものではない。
- (7) 政経演習の実践は、比較的目的意識のはっきりした生徒を対象とした少人数クラスでの実践である。筆者はこの授業と平行して、ホーム・ルーム単位の必修「倫理」(40～45名規模)でもディベート教育実践を進めている。この実践については、稿を改めて論じたい。

注

(注1) 獲得型教育の詳細については、拙編著『海外帰国生』(太郎次郎社 1990年) 参照。

(注2) I C U 高校では様々な教科の中で獲得型の実践が試みられている。この内、政経レポートの実践の詳細については、拙編著『帰国生がいる教室』(NHKブックス 1991年) 参照。

(注3) ディベート指導のためのテキストとしては、以下の著作を参照。

Freeley, A. Argumentation and Debate: Rational Decision Making. California; Wadsworth Publishing Company, 1976.

Frost, M. Speech: Principles and Practice. Illinois; Scott, Foresman and Company, 1987.

Verderber, R. Speech for Effective Communication. Chicago; Harcourt Brace Jovanovich, 1988.

(注4) 「高齢化社会と福祉」に関する研究発表を生徒の活動を中心に紹介したものとしては、拙著『討論や発表をたのしもう～ディベート入門』(ポプラ社 1993年) の第4章を参照。

Dabate Education : The Philosophy and Practice

(English Résumé)

Jun Watanabe

For the past thirteen years, the author has taught an elective course named "Special Seminar in Politics and Economics" to senior students at ICU High School, a school specializing in accepting returnees. This class is unique in that it consists of student presentations and debates.

The term "debate education" refers to a style of education that is radically dissimilar from the traditional Japanese education style which emphasizes acquisition of knowledge by the students. On the contrary, this style of education presupposes an active participation of the students. More specifically, this kind of education proceeds as follows: the students conduct a research on a particular topic, make a presentation of the research, and have a debate with classmates based on it. Through this method, the students not only acquire pertinent knowledge concerning world-wide issues but also learn the skills to conduct researches and acquire various means of self expression.

The objectives of this course are as follows:

First, besides the acquisition of the basic knowledge concerning social issues, they are to experience the joy of self-expression and to understand the significance of inspiring each other through learning together.

Secondly, they are to learn the basic skills of conducting researches, presentations, and debate (and discussions).

Thirdly, they are to collaborate with their classmates on a research concerning a specific social issue (such as those concerning the problems of the ageing society or problems concerning the environment) and propose solutions to those at the School Festival. This will enable them to encounter the difficulty and challenge of presenting the issues to an audience outside of the school.

Finally, through these activities, the students are to develop their intellect into one that is critical and analytical.

The students are satisfied with what they have acquired through this course in the past year. This is because they have come to realize the importance of speeches and debates in the society and moreover, they have had the chance to develop those skills. They have also attained the ability to consider matters from multiple points of view and were satisfied with the successful results in their School Festival Project.

The role of the instructor is not only to transfer knowledge to the students but also to serve as an advisor whose primary role is to encourage the students to teach themselves and research on their own and to give them pertinent directions or advice, if any.